

黒毛和種子牛 1 例における先天性肝外門脈体循環 シャントの手術症例

加藤圭介[†] 高橋海秀 山本哲也 原 知也
足立 全 岸本昌也 加藤大介

島根県 開業 (株)益田大動物診療所：〒699-3676 益田市遠田町 1670-3)

(2023 年 5 月 31 日受付・2024 年 4 月 8 日受理・2024 年 7 月 27 日公開)

要 約

7 カ月齢，雌の黒毛和種子牛が，配合飼料の採食量が少なく，間欠的下痢を示し，体重 70 kg と発育不良を呈していた。血液生化学検査において，血清中総胆汁酸濃度 (268 $\mu\text{mol/l}$) と血中アンモニア濃度 (87 $\mu\text{g/dl}$) が高値を示し，先天性門脈体循環シャントが疑われた。カラードプラ超音波検査では，肝外において門脈と後大静脈の間に乱流を認め，開腹手術時，診断のために実施した門脈造影検査では，肝臓内門脈の枝状構造は描写されなかった。肉眼的に確認したシャント血管を鉗子により遮断した後，再度実施した門脈造影検査では枝状構造が描出されたため，この血管を完全結紮した。本症例は 27 カ月齢にて体重 630 kg と発育の改善を認めた。門脈造影検査は，本疾患の診断及び術中のシャント血管の結紮部位の確認に有用であった。——キーワード：子牛，黒毛和種，門脈造影検査。

----- 日獣会誌 77, e75~e80 (2024)



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/77/7/77_e75/_article-char/ja